

## ルターの足跡を訪ね、 10年に1度の受難劇を観る



義村小夜子（札幌北クラブ・メネット）

私は3年前教会便りに出た記事を見て、この旅の参加を希望しました。今から10年前、友人より受難劇を観たとの葉書を貰い、10年後喜寿の記念に元気なら参加したいと願っていました。昨年6月16日より10日間の旅です。

フランクフルトよりバスでルターの足跡を訪ね、最初はアイゼナハへ到着しました。此処はルターが大学に入る前、高等学校に入学、寄宿した古い家はルターハウスとして記念館になっています。ルターハウスの側のゲオルグ教会は、ルターは度々説教や賛美歌を歌い、すぐ近くに200年後バッハが生まれ、生家もありバッハの子供時代はこの教会の聖歌隊、オルガニストとして活躍しました。この町の山城ワルトブルグ城は、10世紀頃の古い城でルターがギリシャ語より始めてドイツ語新約聖書を完成した所で世界遺産になっています。

アイゼナハよりバスで1時間あまりのエアフルトは、ルターが大学で哲学を学び更に法学部へ進みましたが、激しい雷に襲われ「聖アンナ様お助け下さい。私は修道士になります」と叫びこの町の修道院に入りました。父の期待に背いて学業を捨て自ら決心し厳格な修道院の生活を立派に行いましたが、彼の死への恐怖や不安は解決しませんでした。街の中心の教会広場は毎年11月10日マルチン・ルターデーが開催され、ルターの誕生日を祝うフェスティバルが開催されます。

ルターは1483年アイスレーベンで生まれ、生家も残り、洗礼盤・最後の説教台、死んだ家も残りこの町はヴィテンベルグの町と共に1996年世界遺産に登録されました。小さな町はルターローズが石畳に道路標識として敷かれ、町内散策が出来ます。典型的な中世の街の雰囲気に残る広場にルター像、台座には悪に打ち勝つ・勉学に励む・論争・共に唄うの4つの彫刻が彼の生き様を語りかけ、静かな町の佇まいは500年の歴史を静かに語りかけてくれました。

ヴィテンベルグは北緯51度樺太と同じ緯度にあります。ルターはこの町の大学の聖書学の教授として赴任します。お城の付属教会の門に「95か条の提題」が張り出されました。免罪符の発行などローマ教皇庁の腐敗を非難する論文を発表し、ルターの主

張は宗教改革の動きとなってドイツ各地に広がって行きました。ルターは争いを好まず論争・説教で多くの人々の気持ちを動かしました。書物をドイツ語で書き、聖書の教えを神賛美の形で共に歌える賛美歌を作り、階層・国境を越えて宗教改革の信仰を伝えました。

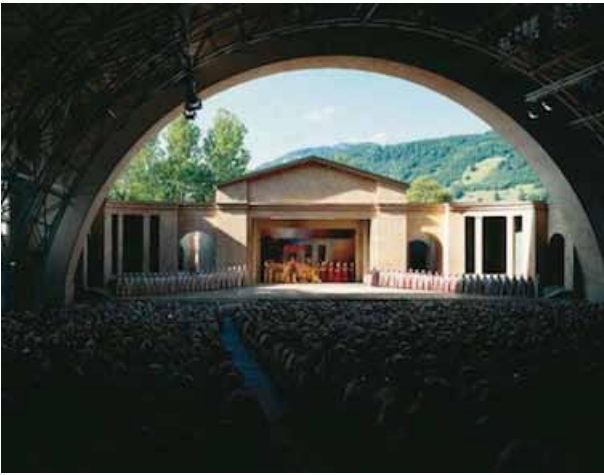


宗教改革の発端となったお城教会の門。この中にルターのお墓があります。



オーバーアマガウはミュンヘンよりバスで1時間くらいの標高800m、人口5千人ほどの谷間の小さな町です。受難劇の歴史は1633年、この地方に戦争とペストが流行し多くの死者出ました。村民はこの不幸から逃れ生き延びる事が出来たら、イエスキリストの受難・死と復活の劇を演じて主にお捧げします」と誓いを立てました。生き残った700人の村民は、1634年聖霊降誕日に受難劇を演じ誓いを果たしました。昨年は410回目41回、5月より10月まで100回あまりの公演があり、オーケストラ合唱合わせ2千人を超える村民が村の仕事の続けながら公演に参加しています。

劇場は正面入り口中心にイエスの磔刑、背後に歴代の公演出演者の写真が展示してあります。観客席4700席（階段状）屋根付、舞台は野外舞台、天候に関わらず開演、昼は2時～5時夕食は決められたレストランにバスで移動、19時より22時まで2部構成です。6時間のドイツ語の暗い受難劇は、舞台のオープ



ンエアから谷おろしの冷たい風が吹き込み気温は 8 度くらい手足もかじかむほどでした。

序幕は男女合わせて 60 人くらいのコーラスが歌い上げ、聖書の記述通り 1 幕は子ロバに乗ったイエスを群衆が歓迎、子供たちは棕櫚の葉を振り踊る。そうして最後の晩餐・ユダの裏切り・十字架を抱えよるけながらイエスはゴルゴダの丘へ、合唱・ソロ・バス・ソプラノオペラのように最後の場面に進みます。11 幕最後は復活の合唱ソプラノソロ「ハレルヤ」で終了です。

この町では外国から来た人を泊める大きな宿はなく、この町から 3~40 分離れた小さな村のペンションへ分宿です。私達も 3 箇所に分かれ移動に時間がかかり、荷物を自分で 3 階まで上げ、受難劇を見た日は夜 12 時過ぎ宿に着きました。

宿泊や食事券は宿泊所で貰い 2 日間はバスで 3 箇所回り、小さな村に 5 千人近くの人が溢れ、自分のバスを沢山のバスから探すのに一苦勞、大変疲れました。

今 1 年過ぎ、3 月 11 日の東日本大震災・福島原発事故の多くの受難が日本に襲い掛かり、改めて受難劇の 10 年に 1 度のこの村で演じる村人の熱意が、村の日常生活を崩さず、この村の生活に合わせ環境を崩さず、しかも 10 年後を目指して受難劇を演じる方も、多くの生きる意味を味わっているのでしょう。この受難劇は 20 世紀に入るとその評判は世界に広がり、多くの観劇の希望者で入場券入手は個人では無理のようです。老いの坂を登る私へのかけがいのない旅でした。

(札幌クラブ : 2011 年 6 月例会卓話)